

第11回太平洋学術会議

The Eleventh Pacific Science Congress

August 22 ~ September 3 1966

UNIVERSITY OF TOKYO

徳永 重元 編

まえがき

地質ニュース No. 146 で報告したような内容にしたがつて 会議がすすめられたのだが そのうち第4部(地質学)関係のものをこの回にまとめることにした。今回の会議は規模が大きいため 原則事項以外は各部ごとの自主運営が認められたため 細部に至っては部毎に多少異なつた面があつた。その良否はさておいて 第4部としては申込まれた来客(Guest)は日活と日航の両ホテルにお世話し 会場との間にはバスの運行を毎日行なつた。また講演会場は東大工学部5号館内に2室をまた事務室(Section Office)も同館内に設け便宜をはかり その設備は全会場の中でも比較的整つた方であつた。

見学旅行としては東京付近第4系や箱根火山巡回 午後の見学先としては 地質調査所(溝ノ口) 三菱鉱業研究所(大宮) 鉄道技術研究所(三鷹)行があつた。

以下にその内容の要約を関係者に書いていただきそれを一応まとめた。(なお講演者のみ敬称は略させていただきます) (徳永重元)

シムポジウム No. 19: 鮮新世および鮮新世以後における海面変化と地殻運動 (Sea level changes and crustal movements of the Pacific during the Pliocene and Post-Pliocene time)

太平洋をめぐる地域の新时期構造運動は互に相関連することが多く 各地域の資料をよく互に理解することが必要となっている。この主題の下に池辺展生教授(大阪市立大)により行なわれた討論では まずドイツに学んだ新進のカチリがスマトラ島弧にそう断層帯が古い時代には火山活動をともなつており 最近では陥没を伴うことを明らかにしてプラワー以後のインドネシア地質学界のスマトラ島弧の研究の内容を明らかにした。

こうした島弧沿岸における新时期堆積層については わが国の研究が紹介されたのは当然で 杉村・成瀬・松田・藤田の研究が発表されている。藤田は近畿地方の例をひいて中部に存在する第四紀層堆積盆地(大阪-奈良-近江)が第四紀時代を通じての運動の結果生じたものであることをのべ 一方杉村らは日本の第四紀以後現在も動きつつある3地域(関東・東北 最上地方・中部 阿寺断層帯)をあげ 200 万年以後未だ動きつつある運動を指摘した。

一方太平洋の対岸アラスカよりメキシコ湾に至る地域においては 日本島弧と同じようにきわめて新しい地殻運動がみられ それに伴う地震や海底地形の問題がとりあげられた。アラスカにおける1964年に起こつた地震の結果について 陸上および海底における隆起現象 沈降地域についてプラフカーは論文を提出している。そしてアラスカの段丘の調査および放射性炭素の研究から 400 年間に 4.3 m もアラスカ湾に沿つた地域が沈み 少なくとも最近 200 年では 1 年 1.4 cm にづつ沈んでいる所があることを指摘した。

こうした第四紀以降の地殻運動は 太平洋にそつ沿岸についても 方々で研究されているが 米国の最南部における海底峡谷についてデイルは試料の放射性炭素分析の結果を多く提示し 海底段丘の対比をこころみていた。とくに われわれに驚異としてうけとれたのは 彼の海底の峡谷における映画(別の機会に上映)であつて 海底峡谷において 流砂があたかも陸上における水のように流れる姿であつた。

このように第四紀以降の運動が局地的であるにせよ それらの相関連性というものが またわが国の第四紀の



太平洋学術会議を記念して発行された切手



第4部 参会者の宿泊した日活ホテル

運動を解釈するのに有用であるという印象のある討論会であつた。

(徳永重元)

シンポジウム No. 23: 太平洋地帯における鉱物生成区と生成期 Mineralogenetic provinces and epochs in the Pacific belt

近年 鉱床の成因の問題について 一方では鉱床生成の物理化学的過程の研究が活発になり 他方 鉱化作用の種類・型・性質と鉱床形成環境の構造地質的意義との関係が 全世界的に再検討・再認識されてきており 今回の太平洋学術会議に際しても この種の問題を論ずることはきわめて重要であるので 東京大学渡辺武男教授がコンビーナーとなり 標記のシンポジウムが組織された。シンポジウムは8月25・26・27日の午前に開催され 次の講演と討論が行なわれた。

8月25日(木) 座長: V.I. スミルノフ(ソ連)

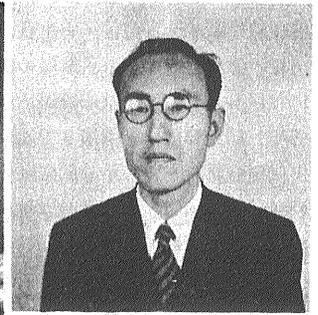
1. C.K. ファン(台湾) 台湾金瓜石地区の金銅鉱床群の特長的様相
2. V.L. バルスコフ(ソ連) 硫化鉱物—錫石鉱床群と貫入岩体との生成関係の問題および鉱床生成仮説に対するその意義
3. M.G. ルブ(ソ連) 噴出—深成複合岩体の岩漿同源性と鉱床生成の特性との指示物としての随伴鉱物および随伴元素
4. I.N. トムソン・V.S. クラブコフ(ソ連) ソ連太平洋鉱床帯の錫—珪酸塩鉱物鉱床形成の白亜紀末期およびアクテイビゼーション過程との関係
5. 竹内常彦・宮沢俊弥・今井秀喜(日本) 日本島弧の白亜紀と中新世における後生鉱化作用の特長

8月26日(金) 座長: W.D. ジョンストン(米国)

6. M.A. ファボルスカヤ(ソ連) 新生代における南東カムチャッカの鉱床生成区
7. V.L. ルジノフ(ソ連) カムチャッカ—千島区における表層母岩交代作用の特長
8. 渡辺武男・立見辰雄(日本) 日本列島の鉱床生成区と生成期との関連における層状金属鉱床群
9. N.H. フィッシャー(オーストラリア) ニューギニア—パプアの鉱床生成区
10. M.K. ロイチョウドリ(インド) インドの構造発展との



第4部 部長(Chairman)渡辺武男
東大教授



第4部 幹事(Secretary)高井冬二
東大教授

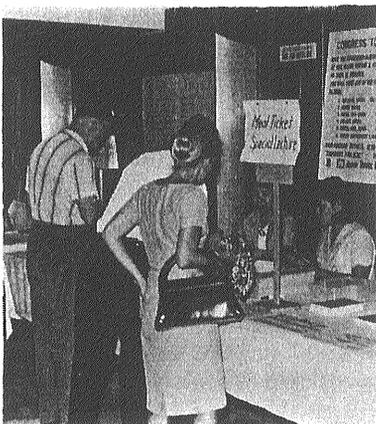
関連における鉱物生成区と生成期

8月27日(土) 座長: N.H. フィッシャー(オーストラリア)

11. 関根良弘・岡野武雄・大町北一郎(日本) 日本列島における鉱床生成の様相
12. R.B. バンド(フィジー) フィジーにおける鉱化作用と火成活動との関係
13. E.A. ラドクヴィツナ(ソ連) 太平洋地帯の鉱床生成の比較論
14. 西脇親雄(日本) 太平洋地帯における鉱染銅鉱床群の分布
15. V.I. スミルノフ(ソ連) ソ連太平洋鉱床帯北西部における鉱床生成の様相
16. M.S. クリシュナン(インド) インドシナー—インドネシアの環太平洋地域の鉱物生成期
(このうち 講演2・3・16は演者が不参加のため取止め 講演10は 副座長の代読であつた)

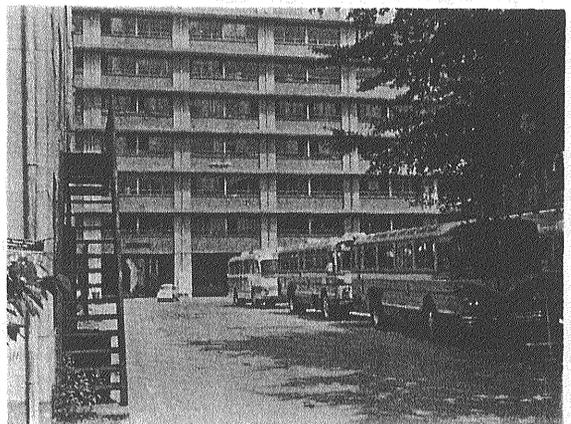
これらの講演の要旨はすでに太平洋学術会議議事録第4巻で刊行されており 討論の概要も近く刊行されるはずである。

講演の内容にふれるならば 講演1においては 演者は金瓜石金銅鉱床が 鮮新—洪積世に形成されたと推論したが 九州南端からフィリピンに分布する同種の鉱床の生成区の問題として注目をひいた。講演4・5は中生代末期の構造運動・岩漿活動と鉱床形成との関係を論じ アジア東部でのこの時期の重要性を浮彫りにし 講演6・7では 新生代における島弧での鉱化作用の性質と特長が論ぜられ 講演8では 日本の別子式層状銅



← 日活ホテルにおける
研究会登録風景

→
第4部 講演会場
(工学部5号館)



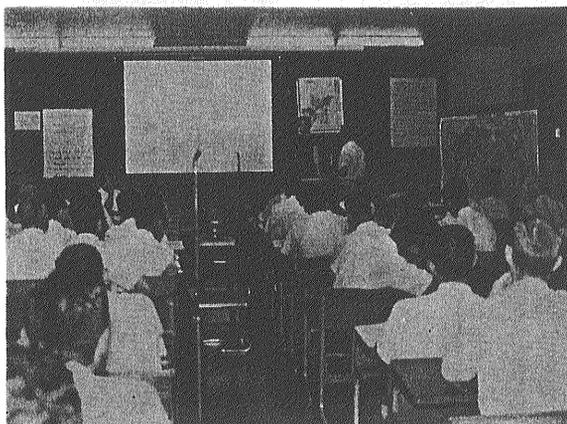
硫化鉄鉱床 古生代・中生代の層状マンガン鉱床 第三紀の黒鉄鉱床など層状鉄床の性質を述べ 地向斜地域におけるこの種の鉄床群が 海底噴気-熱水型鉄床であると結論した。講演9ではニューギニアにおける中生代から新第三紀に至る鉄床区の特長を論じた。講演11は 日本列島の構造発展に対応する鉄化作用を鉄床生成区・生成期に区分して論じ 講演12では フィジー島の第三紀の火成活動と鉄床生成とを示して 同島にも黒鉄鉱床の賦存する事が強調され多くの関心をひいた。講演13では 太平洋東西両岸地帯の構造地質発展の特長的様相と鉄床形成の大問題を論じ深い感銘を与えた。講演14では 環太平洋地帯での斑岩銅鉄床の賦存の共通性と特長および東南アジア地域で続々発見されてきた同型鉄床の特性を論じた。講演15ではシベリア東部の太平洋鉄床帯における構造区分と 4回の造山輪廻発展史および各々に対応する鉄化作用の特性を詳論した。

このシンポジウムにおける12講演と短時間の討論では当初の目的を十分には達成することができなかつたかもしれないが ローカルな事象から広範囲の地帯における各種鉄床のあり方に われわれの目を向けさせる点できわめて有益な示唆を得ることができたと思われる。大陸地帯と太平洋との境界地域にあたる極東-東南アジア地域は きわめて複雑な地史的変せんによる鉄床の形成の点で 地球上の他の地域との比較においてきわめて興味深い所であり 鉄床形成は 地殻上層部・表層部における過程のみでなく 深くマントル層にまで間接的にせよ密接な関係を有するものであるだけに 太平洋周辺地域の鉄床生成に関する今回のシンポジウムは 同時に開催された造山運動のシンポジウムと共に時宜に適したものであつたといえよう。

(関根良弘)

シンポジウム No. 24: 環太平洋造山運動の年代と性質、Age and Nature of the circum-Pacific Orogenesis

8月25・26・27日の3日間に 上記表題によるシンポ



第4部(地質)講演会風景

ジウム(第4部 地質学関係の課題討論4つのうちの1つ)がコンビーナ松本達郎教授(九大)により開かれた。提出論文は 22あつて それらを講演者の国別にしてみると アメリカ合衆国6 ソ連5 日本3 ニューゼーランド2 台湾・フィリピン・インドネシア・南米コロンビア・カナダ・フランス各1となる。

松本教授は開会冒頭に このシンポジウムに寄せられた論文のフル・テキストおよび討議録は 幸いにもオランダ エルシェヴァール社刊行の雑誌 Tectonophysics 1967に掲載されることになつた と挨拶された。ここでは紙面の都合もあつて 各々の論文を詳しく取り上げることができないので 講演者と論文名 それに若干のトピックを簡単に紹介してみたいと思う

- ①ジェ・エー・ロディック他3名:カナダにおける環太平洋造山帯の年代と性質; カナダのゴールドイエラ造山は先カンブリア時代からジュラ紀までの原岩を含み 古生代中期から第三紀までに6回の造山作用のパルスを記録している
- ②エル・クラスニイ他1名:太平洋モビル帯北西部の地質学的発展の歴史と地質構造; 多くの古地理図および古地質構造図に 地球物理学的データを加えて大陸・海洋および海岸隣接地帯の地殻の厚さを示した。また北米・南米を含めた環太平洋地域では 後期中生代において地殻に大きな割れ目が生じた結果花崗岩類を形成した
- ③松田他2名:日本における後期新生代の造山作用; 3つのペア変成帯 すなわち東日本弧・日高造山帯(日高帯および神居古潭帯)・南西本州弧(領家帯および四万十帯)を論じた。とくに東日本弧は北東に千島弧 南には伊豆マリアナ弧に連なり かつ先中新世の造山帯を切っており 現在も活動中の島弧の特質を示している。その一連の造山作用の現象を1つの独立の造山作用と考え これをミス造山作用と呼び 現在も活動中のペア造山帯であると結んだ。
- ④何:台湾の造山運動
- ⑤ゲルバシオ:フィリピンの造山作用の年代と性質; 最古相は褶曲したジュラ紀以前の変成岩からなる基盤であつて花崗岩の貫入とミグマタイトの形成を伴う tectonic relic とされるもので ヨーロッパのバリスカン造山に対比、おもな造山作用は白亜紀以降のアルプイン造山によるもので4つの変動が認められている。1つの意見として 造山運動の名称はただ時期が同じであるというだけの理由で 地域的に遠く離れたヨーロッパのこぼを使うのは好ましくないと述べられた。また横ずれ断層の全移動距離について確答は出なかつた。
- ⑥ジェー・エー・カチリ:インドネシアの錫鉄床の構造と年代とくにバンカ島について。
- ⑦シー・エー・フレミング:南西太平洋における中生代造山史に関連する生物地理学的変化; 造山作用により生ずる地理的变化が どのように生物界に変異を起させるかという観点

に立ち1つのファウナの最初の出現に注目した。そして各種ファウナの消長史を編むことによりランギタータ造山の高潮期を白亜紀に推定した。もっともこの方法には生物地理学的変化は造山運動にのみ原因を求められるべきでなく他にも原因を求めるべきだという意見があった。しかしファウナにみられるこのような重大な変化は地背斜に起因するものすなわち造山運動によるものであると一蹴してしまった

⑧ エッチ・ビュルグル：南米コロンビアにおけるアンデアン系の造山作用（松本達郎教授が代読）

⑨ エム・エム・レベデフ他1名：太平洋帯の内側の変成塊の1例としてカムチャッカの変成帯；かつて先カンブリア時代の変成岩として地質図に記載されていた地域であるがこの研究の結果西側のスレディニイ山脈と東側のガナル山脈とに変成帯があり前者では紅柱石・藍晶石および珪線石などにより分帯され両変成域の特質からペア変成帯説が可能である

⑩ ダブリュ・ジー・アーンスト他1名：フランシスカンおよび三波川変成域の岩石学的比較；苦鉄質変成岩の鉱物組合せから変成岩形成の上限を推定。フランシスカンは200—300°C 7—8 kb 三波川は250—350°C 5—7 kb という条件であろう

⑪ アル・ジー・コールマン：カリフォルニアおよびニューカレドニア産の藍閃石片岩

⑫ ジュー・エル・アロンソン：ニュージーランドの深成および変成岩の絶対年代；Rb-Sr および U-Pb 法により議論 i) ランギタータ造山および ii) それより200 m.y. 以前とに2大別され先カンブリア時代を示す結晶片岩は見付かっていないしかしジルコンおよび Rb-Sr 法（ホウル・ロック）から判断して800 m.y. および12億年以前の岩石がありそうである

⑬ ディー・エス・クームス他1名：ニュージーランドにおける変成帯および造山運動；アルパイン断層に沿う300マイル水平移動を復元して変成帯を論じた変成作用の時期については⑫のアロンソンのデータを全面的に採り入れていたが日本の地質学者にとっても興味深かったのはアルパイン断層に斜交する Median Line を設定し中生代後期におけるペア変成帯の可能性を指摘したことであるさらに結晶片岩の黒雲母のK-A年代がきわめて若い点について *ridiculously small age* という面白い表現を用いていた

⑭ 河野他1名：K-A法による日本の花崗岩類の火成活動の時期；深成作用は白亜紀中期から第三紀にかけて一定の方向に進みしかも連続的に活動している鉱物年代は花崗岩形成の時期というよりはむしろ岩体の上昇（固結後の）時期を示すのではないかという質問があった

⑮ ジェ・アヴィアス；ニューカレドニアのおもな超塩基性岩塊の衝上断層地塊

⑯ ダブリュ・アール・ドイツキンソン：フィジー島の構造発達史；下部第三系にトータル岩および閃緑岩が貫入してい

るこの変動に伴いプレーナイト・パンペリー石変グレイワケ相 および 緑色片岩相の変成岩が生じたこれを Wainimalatholo 造山と呼ぶ

⑰ ダブリュ・ハミルトン：南極の造山運動

⑱ ダブリュ・ハミルトン：東アジアおよびアラスカにおける大陸漂移

⑲ ユー・エム・プシィチャロフスキ：太平洋構造帯の構造の概要

⑳ エヌ・エー・ボグダノフ：西部環太平洋の古生代地向斜；北半球北部から南半球南方に延々と連らねた3つの地向斜帯を紹介 i) Tasman-Katasiatic 帯 ii) Hokonui-Kitakami 帯 および iii) Otago-Sakhalin 帯である

㉑ エヌ・ピー・ヴァシルコフスキ：太平洋モビール帯の地質学的性質

㉒ 松本：環太平洋造山作用の基本的問題；古い時代の地質構造のちに再構成される点を重視しこの地域に特有の多くの問題点を総括した

討論が終りに近づいた時 湊正雄教授(北大)が八木健三教授の介添えにより演壇に立ち日本には先カンブリア時代の基盤が実存する多くの事実をもっている……と述べられた。討論終了にあたってとくに発言を求めたニュージーランド・オタゴ大学クームス教授はこのように立派に組織された討論会と提出された論文・討議を通じてたくさんの有益なデータを得ることができた。ここでうけた新たな刺激を各国へ持ち帰りより一層の良い研究に役立てたい。コンビーナ松本教授に感謝したいと参加者に呼びかけた。参加者はこれにこたえて盛大な拍手で感謝の気持を表わし受けて立った松本教授は熱心に討議いただいた皆さんのお蔭ですと結ばれて盛会だった3日間にわたる討論会の幕を閉じた。

(服部 仁)

シンポジウム No. 25: 太平洋における第三系の対比と気候変化 Tertiary correlation and climatic changes in the Pacific

この主題の下に浅野清教授(東北大)コンビーナとなり開催された。このテーマにおける共通の話題としては当然浮游性動物化石とくに海をめぐる各地域において対比できるものが選ばれるわけだがニュージーランド・オーストラリア等南半球における浮游性有孔虫化石と北方オホーツク海方面との研究がこのテーマの下で共に発表されたことはまことの有意義であった。ソ連の有孔虫研究は非常に多くの成果があるが従来独自の命名法を用いているので必ずしも比較しえなかつた点があ

るがこの機会に少しでもお互の共通点が見出せたことと考える。内容としてはルドブルック（ニュージーランド）はニュージーランドの第三系を浮游性有孔虫により分帯した結果を示し、ソ連のセロヴァは一番問題となっている古第三系から白亜系に至る地層について、ダニアン・メストリヒチアン等の地層と考えられるものからの有孔虫群を示した。

同じくソ連のツイドコヴァはおもに樺太において研究しているが、堆積のサイクルと含有化石とくに彼女の専門は軟体動物化石であるから、これらを含めた生層序との関係に論及した。日本のものについては浅野・棚井らは従来の結果をさらに総括した。このように第三系の対比問題について各地域の精細な研究成果から集積の傾向を示しこの集積を通じてとくに知られることの少かったソ連の成果が発表されたことにも意義がある。

（徳永重元）

各 個 講 演（地体構造の部）

講演は8月29日から9月2日まで、湊正雄、森本良平両教授主催のもとに行なわれた。はじめ33の講演が予定されていたが都合で7の講演が取りやめになった。講演を国別にみると日本の10はことにめざましく、次いでソ連邦の進出も著しく6を数えた。続いて北米の3、ベトナムの2、ソロモン諸島（英保護領）の2、韓国、中華民国、インドネシア各々1の順であった。聞くことのできた講演のなかから感想を述べてみよう。

韓国のチョングは後期ジュラ紀から前期白亜紀に属するミオゴク層は著しいダエボ変動をうけ、ナグドング統のウルリオンサン層に不整合に被覆され、ダエボ変動の時期を後期ジュラ紀のキンメリッジ階であると論じた。ベトナムのタク・テイエト両氏はインドシナにおけるカンブリア紀からジュラ紀にわたる地史を概説し、とくに石炭紀から二疊紀へかけての、コラツト地塊を中心とするインドシナ大陸の発展と三疊紀から下部ジュラ紀へと海退・現在の陸地の出現を強調した。

ソ連邦のエイ・エム・スミルノフは環太平洋造山帯の先カンブリア紀基盤の問題を論じて日本の基盤に言及し、領家帯、日高帯、およびカムチャッカ中央山脈の生成を前期リフエアン階に、三波川帯、カムイコタン帯、およびサハリンの生成を中期リフエアン階に求めたが、日本における先カンブリア紀基盤存否の問題は今後慎重に検討されねばならない。同じくソ連邦のテイルマンは東北アジアの構造発達史を論じて、ペルコヤンスクーチュコッタ中生界造山帯は本来先カンブリア紀一古生界を通じて大陸基盤構造の破壊により成立した内陸地向斜の生成物で、後期ジュラ紀から前期白亜紀

に造山運動を経験した。コルジャクーカムチャッカ褶曲系は本来の地向斜性堆積物で、後期中生代から新生代へかけての造山帯であると述べた。さらにこれらの造山帯は前記白亜紀から古第三紀にかけて生成した、オホーツク・チュクチャー火山帯により分けられると論じた。さらにソ連邦のゴリヤチェフはカムチャッカ弧の構造発達史を述べてカムチャッカ弧はほぼ後期白亜紀から中後期漸新世へかけての中央部上昇運動により生成したと論じた。同じくソ連邦のエルリッヒはカムチャッカ弧の後期鮮新世から洪積紀へかけての後生変形に言及した。坂東は日本三疊系を菊石化石にもとづいて11に分帯し、生層序の確立と対比を試みた。市川浩一郎は日本の主要地向斜は二疊紀-前紀中生代を通じて終末をとげ、そこに発生した地帯を本州帯と名づけ、その外側に中生界を通じて発生した地向斜地帯は、西南日本では四万十帯、東北日本では北上外帯、日高帯であると論じた。木村敏雄は日本各地の構造解析から日本の褶曲構造の型を3のグループに分類し、いずれも深部と浅部とでは褶曲の型および大きさに差異と関連性のあることを強調した。

小西健二ほか2名は琉球列島の先中新世に3の構造運動を認めた。徳山は日本の中生代褶曲山地について造山堆積物の構造、古地理、層相解析により造山輪廻を5段階の構造史にわけて、さらに大陸側の三疊紀秋吉造山輪廻と太平洋側の白亜紀佐川造山輪廻の関連性を論じた。米国のポストロムは北米の太平洋岸の海嶺について論じた。さらに米国のディーツは海洋地向斜のEuqesynclineとMiogeosynclineの成因と発達について論じ、日本の地質学者との間にも討論があり出席者の関心をあつめた。

ほかにインドネシアのテイヤ、ソ連邦のウステイエフ、日本の勘米良、松本隆、ベトナムのタクにより、それぞれ火山あるいは火山帯の構造について論ぜられた。さらに日本の本田、松沢勲、ソ連邦のガネシン、中華民国の孟、ソロモン諸島のグローバは主として完新世の地質構造を論じ、関東大震災あるいは濃尾大地震に言及した。南極やソロモン諸島の地質についても講演あり。佐々ほか2名は津軽海峡の海底地質と地史について論じた。

このように各国学者が一堂に集まり、研究者相互に意見の交換と討議が行なわれたことは、今後の研究においてどこに問題があり、どの方面の研究を進めなければならないかということについて、光明を与えたものと思う。ソ連邦をはじめ近隣諸国の勢力的な研究を身近かに見せて聞くことができ、日本周辺の地質にいくらかでも目をむけることができるであろう。米国の

研究からは 海底地質の重要性をさらに知り 海に囲まれた日本において 海洋地質学などの学問が さらに発展していくよう願っている。日本の研究からは 構造発達史において 対立した見解が発表されていたが 相互の今後の研究において それぞれの方向を発見していくよう願っている。

(神戸信和)

各 個 講 演 (古生物学の部)

8月29日と30日に行なわれた。最初に日本の猪郷は日本各地で最近発見されたコノドント化石についてのベタイ・マレイシアにおける研究成果との比較 とくに日本における阿哲台地における業績について発表を行なった。

コノドントが発見されてから数年たって急速に研究がすすみつつあるのは注目されることである。

小西は太平洋地域諸島の蘚虫類化石を鮮新—更新世マリアナ石灰岩中より研究し その構成との重要性を指摘した そして蘚虫類化石群がその石灰岩の海水温の反映をよく示しているとのべた。大形化石である頭足類や軟体動物化石についても浜田・鎮西・岩崎らが日本のものについて発表した。

韓国つまり南朝鮮半島地域における古生物学的成果は最近かなり発表されて来たが とくに微化石についての成果 生層序学的研究に進展がみられる。

海洋における放散虫群集 海底に下した試錐コアの有孔虫分析については 林および内尾が非常にくわしい研究を発表した。その他 岩石学および堆積学に関する部門もあったが その詳細については稿を改めてご紹介したい。

(徳永重元)

特 別 講 演

太平洋学術会議の第1週と第2週の夕方には ほとんど毎日 各分野の専門学者による公開講演が 午後6時半より約2時間安田講堂で開かれていた。8月26日

(金)夕には オーストラリア アドレイド大学地質学教室のグリーズナー教授による「生命発生の最初の30億年」の講演と 飛び入りで ソビエト南極探険隊の記録映画の上映があった。

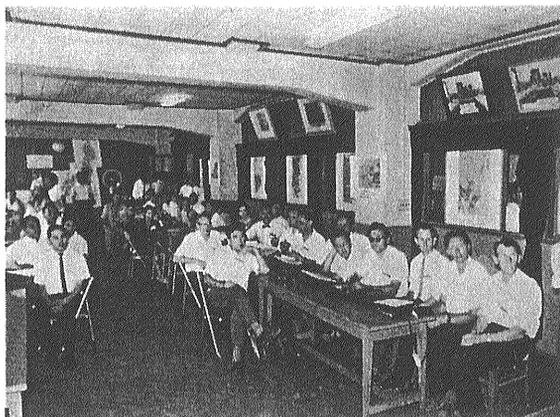
このようなむずかしい題目の講演でしかも夜間に 聴衆が集まるかどうか危ぐされたが 200人あまりの都民がじっと聞きいっているのを見て その熱心さに感激した。教授の講演は 先カンブリア時代の生物 生命の発生に関する生化学的な議論 オーストラリアで発見された今から30億年も以前の無殻生物化石 それに関連して無脊椎動物の発生と進化に関する資料の紹介であったが その中で 地球の歴史を1年の暦にたとえると いろいろの生物が出現し始めたのは10月下旬 古生代の始まりは11月半ば 人類の出現は12月31日午後11時44分そして人間の平均寿命は1秒たらずであり 地球の歴史の上で不明な1月から10月まで(45億年前から約10億年前)の間の長いブランクの期間の研究が 生命の発生 地球の進化を解明する上に 大事な役割りを果たすであろうことを強調された。

(佐藤良昭)

地 質 調 査 所 見 学

会期も終りに近づいた8月30日午後 地質調査所の溝の口庁舎に会議参加者の有志が見学を訪れた。これは地質部門の特別見学旅行として計画されたものであったが 関連部門からの参加もふくめて約90名 バス2台に満員という盛況であった。

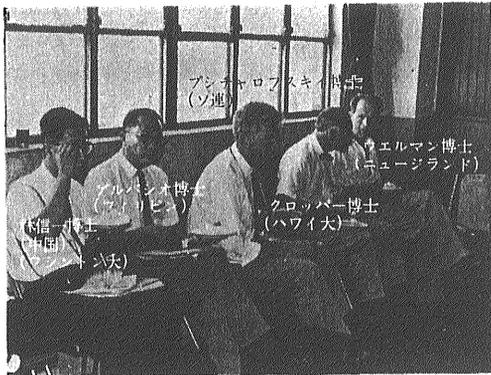
東大のバスターミナルを12時30分出発 都心を車窓から眺めながら自己紹介をすませる頃には同乗した所員たちとソ連の学者とが お互いに不自由な英語でやりとりするなど なごやかな気分となった。参加者はソ連邦から構造・鉱床地質学の大家ヴィ・アイ・スミルノフ (Smi-rnov) 博士など20人にも及んだのをはじめ オーストラリア・フランス・インド・韓国・ニュージーランド・フィリピン・スイス・台湾・タイ・アメリカなどのほか日本国内からの人もまじえて多彩な顔ぶれであった。



地質調査所会議室にて 所長の挨拶をきく見学者一同



所長と歓談する一行



地質調査所会議室で休憩中の外人たち

2時前玄関に到着した一行は 4階会議室で佐藤所長の挨拶を受けたのち 3組に分れてただちに所内の見学に入った 標本室では濃飛流紋岩などの白亜紀酸性岩 丹沢山地の変成・深成岩 箱根火山の地質模型と岩石など焦点を絞った展示 なかでもたくさんの古地理図と標本・写真を組合せて日本の地史を追った新しい陳列は評判がよかったようだ。日本全土の50万分の1地形地質模型を囲んだ人たちは石原技官の流暢な説明に次々と質問を浴せて次のコースに移ってもらうのに一苦勞。鉾種別にランプのつくこのモデルは鉾床区シンポジウム参加者の気に入ったらしい。そのわきでニュージーランドの構造地質学者ウエルマン(Wellman)博士が同国南島のアルパイン断層と日本の中央構造線の異同を熱烈に論じていた。出版物の展示室では明治・大正の地質図と新しい同縮尺の地質図とが幾組も並べられ 地質調査百年の歴史を示してわれわれ所員にも興味深い。ここでは200万分の1日本地質構造図(原稿図)がとくに注目をひいた。ソ連の学者たちが同国で出版された構造図と比較しつつ 早く日本でこれが印刷されるようにと希望していた。

物理探査部にはUMP地震部門で活躍中の地震計類と四国大歩危地域の走時線図 海上人工地震による日本海溝・フィリピン海溝のプロファイルなどが展示されているので 深部物理探査技術やUMP計画の進行 とくに

深部試錐などの議論に発展した。地球化学課の質量分析計室では担当の柴田技官にカリウム・アルゴン法年代測定の実況や 新しい同位元素地質学へのとりくみ方などが質問された。薄片製作室で岩石片を0.2mmの薄さに切断する真空吸引式の切断器を熱心に見ている人たちもあった。所内を上り下りしながら一巡りして4階会議室にもどる。茶果を手にくつろぎながら所員たちと歓談 印刷物交換のために宛名を知らせあつたり 日本で使用中の地下水調査用具を購入する相談をしている組もあった。海外からこれだけ多数の来客を迎えることはしばしばあることではない。見てもらうのは単なる建物・設備ではなく生きた仕事であり 人と人との交歓とにより意義があるのであろう。現状では言葉の障壁はたしかに否定できないが それでも できるだけ多くの人が積極的に来客と接触することによって次第に障害を除いてゆくことが 得がたい機会を有効に生かすみちだと感じたのだった。

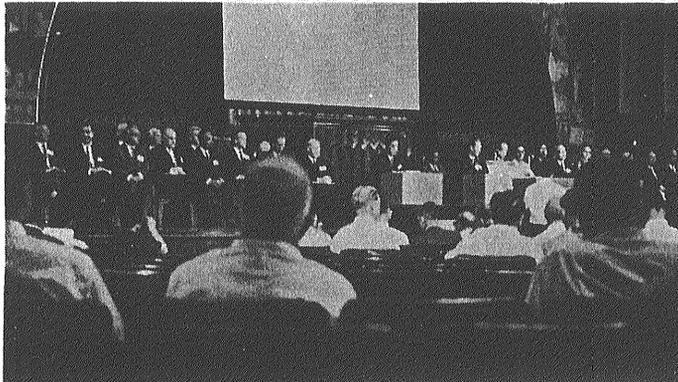
(小野晃司)

最終総会

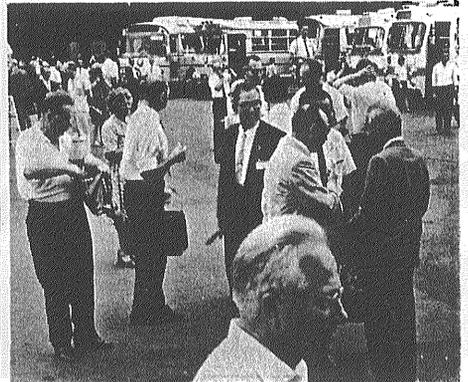
9月3日安田講堂で開かれた総会は実質上閉会式であった。特別シンポジウムや旅行が終っていないのでこの様な形式をとったのである。

席上 朝永会長・楡山総幹事は交々立って各国代表の大会に参加されたことに感謝し 同時に国内の委員の労苦にたいしてもその配慮を示した。この期間中とくに台風と地震がなかったことは 関係部門にとっては残念であったと 皆を笑わせ無事終了という安心と多く成果をえた喜びが 国内委員の顔にみられた。次回オーストラリアからは受入態勢の関係で来客の数を制限したいとのべられ 1965年まで太平洋会議の仕事は常置委員会(Standing Committee)の手に移ったのである。会場から去って行く多くの出席者が 日本にきてえたものは色々あつたろうが 古今未曾有という大集会を通じ 当事者も出席者も各国の科学者の交流が 太平洋の自然科学発展の上にかに有効であるか考えさせられた大会であった。

(徳永重元)



最終総会(General Meeting)は安田講堂で行なわれた



大会が終りお互に別れをおしむ人々